

# フィールドスタディにおける情報獲得と共有に関する研究

## 1. 研究代表者名

[国立情報学研究所] 相原 健郎

## 2. 共同研究者

[国立情報学研究所] 高須 淳宏

[国立極地研究所] 海田 博司

[国立極地研究所] 外田 智千

## 3. 平成 18 年度の研究実績報告

### 3-1. 研究目標

フィールドスタディの現場では、時間的・人的・認知的など様々な側面で制約を受けるため、調査時点で重要だと認識されている事項はレポートに明記されるが、そうでない情報は記録されないばかりか、調査に携わった研究者らの記憶にすら残らない場合も多い。しかし、様々な制約を受ける現場における思考や判断と、その後のそれらとが一貫しているとは必ずしも言えず、また時間経過に従って変化していくことも考えられる。また、その報告のみで調査内容を知る他の研究者が、その調査資料から新たな知見を発見することも容易ではない。

本研究課題では、フィールドスタディにおいて、さまざまな理由から調査現場で保存しきれない情報や見落とされた情報などの獲得と、その利活用に関する研究を進めている。現場の貴重な情報を収集し、有効活用できるように適切に変換・管理し、必要な時に適切な形で提供できるシステムの構築を目指し、特に以下の点に着目して研究を進めている。

1. 調査者の視点に立った情報キャプチャリング
2. 情報共有や記憶の想起を支援する提示法

### 3-2. 平成 18 年の研究成果（概要）

2 年次である平成 18 年度は、

- スタンドアローン環境での情報獲得のためのシステムの実験
- 協調作業環境での能動的情報獲得の提案
- 収集された情報の統合手法の提案
- システムの実装と実験

を進めた。特に、スタンドアローン環境と協調作業環境とを区別し、スタンドアローン環境の支援のプロトタイプシステムの開発を進めた。

平成 18 年度後半には、プロトタイプシステムを用いた実験を進める予定であったが、共同研究者である外田助手（極地研）が 11 月よりオーストラリアの南極観測隊に同行することになった。そこで、18 年度中は、試作機の試行を東京で進めつつ、協調作業環境用システムの開発を先に進めることとした。外田助手は 19 年度も日本の南極観測隊で現地に赴くこととなっているため、19 年度にシステムの実証実験を行えるための準備を進めた。

### 3-3. 今後の展開

3 年次である平成 19 年度は、

- トータルでの実験
  - 実データを元にした情報活用に向けてのモデル提案
- を行う。次の展開に向け、本研究課題での成果を取りまとめる。

## 4. 成果発表実績

### <会議録>

1. Atsuhiko Takasu, and Kenro Aihara: Quality Enhancement in Information Extraction from Scanned Documents, ACM Symposium on Document Engineering (DocEng 2006), Amsterdam, pp.122-124 (2006).
2. 藤澤 弘美子, 相原 健郎: 文章の読解支援のための効果的な図的表現について, 人工知能学会 第 24 回ことば工学研究会予稿集, pp.77-81 (2006).
3. 藤澤 弘美子, 相原 健郎: 読解支援にむけたテキストの図的表現手法の一提案, 第 69 回情報処理学会 全国大会 予稿集, 4F-7 (2007).

### <一般講演>

1. 相原 健郎: エンドユーザによる、エンドユーザのための実世界情報の収集／活用と、それを支える社会基盤について, CEATEC JAPAN, 幕張メッセ, 2006 年 10 月 5 日.